

4 PEG-IFN 治療により速やかに自己免疫性背景が改善した C 型慢性肝炎の 1 例

菊池 大輔・若林 博人・河野孝一郎
安西 秀聡・茂古沼達之・良田 祐平
竹田綜合病院消化器科

抗核抗体と免疫グロブリンが高値の慢性 C 型肝炎患者に対し、PEG-IFN α 2a を投与し SVR と共に自己免疫性背景が改善した症例を経験したため報告する。

症例は 25 歳，女性。ALT 59 IU/ ℓ ，HCV-RNA 58 IU/ ℓ ，genotype 1b，肝生検 F1/A1 であった。しかし，抗核抗体 \times 1280 倍，IgG 2519mg/dl と高値であった。慎重に IFN 治療を開始し，1 週間で ALT は正常化，2 週後に HCV-RNA 陰転化，SVR となった。治療開始後，抗核抗体，IgG も改善傾向認め，投与終了 20 週後には抗核抗体 160 倍，IgG 1585mg/dl と改善を認めた。

【考察】本症例は抗核抗体 1280 倍と高値であったが，SVR の確率が高いと考えられたため，慎重に IFN 治療を開始した。IFN 治療により SVR が得られ，抗核抗体，IgG なども改善，正常化を認めた。HCV 感染が免疫学的異常を惹起してたと考えられた。

5 血清総ビリルビン値が 60mg/dl を示した肝障害の 1 症例

杉山 幹也
県立坂町病院内科

症例は 52 歳，男性。平成 12 年 3 月 29 日尿の黄染と全身倦怠感を主訴に初診入院。GOT/GPT = 906/1496 IU/ ℓ ，T/D-Bil 15.1/14.4mg/dl と高度の黄疸を認め，画像診断で閉塞性黄疸は否定された。ウイルス肝炎は A～E 陰性。CMV，EBV，ヒトパルボ B19 陰性。自己抗体陰性。入院後トランスアミナーゼは徐々に低下したが第 14 病日に T/D-Bil 59.5/48.2mg/dl と黄疸が増強し同時に急速な正球性貧血の進行を認めた (Hb 値 5.39/dl)。骨髓は赤芽球系細胞の著減と G/E 比 35.6 と高値を示し赤芽球癆と診断。肝生検は急性ウイルス性肝炎の所見であった。黄疸に対しビリ

ルビン吸着，血漿交換を，急性腎不全を合併し CHDF を行った。赤芽球癆は輸血とステロイド投与で徐々に改善した。現在まで軽度の腎機能異常が持続するが他に合併症はなく通院中である。高度の黄疸を生じた非 A～E 型急性ウイルス性肝炎に急性赤芽球癆を合併した 1 例を報告した。

6 コンセンサスインターフェロンの短期少量投与により著効が得られた，白血球減少，血小板減少を伴う C 型慢性肝炎の 1 例

高橋 達・岩崎 友洋・佐藤 明人
山田 聡志・三浦 努・坪井 康紀
柳 雅彦

長岡赤十字病院消化器科

症例は 61 歳，女性。輸血歴あり。C 型慢性肝炎の治療目的に 2005 年 1 月 5 日入院。肝脾腫なし。GOT/GPT = 101/116 IU/L，白血球 1,900/cmm，血小板 6.5 万と減少あり。HCV 血清型 2 型，HCV RNA = 160 KIU/mL と，2 型高ウイルス。PAIgG は 1,840ng/10⁷cells と高値。肝組織は CH (F2/A2)。白血球，血小板減少があることから，コンセンサス IFN (以下 CIFN) 900 万単位，当初より週 3 回皮下注 6 ケ月間の投与で開始。血小板は最低 3.3 万，白血球は 1,400，好中球絶対数 285/cmm まで減少したが，予定どおり投与を完遂し，ウイルス学的著効となり，PAIgG も正常化した。IFN 感受性の 2 型 HCV による C 型慢性肝炎では白血球と血小板の減少を伴っていても，少量短期の CIFN の投与で著効を得られる可能性がある。なおその際，きめ細かい経過観察と，IFN の種類，投与量，投与方法についての判断が重要である。